

### 3・11を読む

松岡正剛著

あの日から500日がとうに過ぎて、2度目の暑い夏も峠を越えた。それなのに何もできないままに、無駄に日を過ぎてしている自分が恥ずかしくなるような本が出た。

インターネットで長年にわたって書き継がれている書評サイト「千夜千冊」の「番外録」のなかから大震災、原発、フクシマ、事故、陸奥と東北

をテーマとした60冊の書籍が

紹介されている。あの日の前に出された本も並ぶが、あのあとに書かれた本の数々に驚かされる。そして、そのなかでも原発とフクシマにかかわる書物がいかに多いことか。

もちろんそれは著者の選択にもよるが、大震災という自然災害とは別の、福島第一原子力発電所で起こってしまった

大失態を、我々はおそらく永遠に抱え続けなければならぬのだということを表しているように思えるのである。

とり上げた本のなかの一冊をまとめて著者は、「フクシマの原発事故にかぎらず、事故のほとんどは人災である。それを誰も言い逃れすることは許されない」と書き記す。そうである限り、本書にとり上げられた本は忘れることなく読み継がねばならない。

(平凡社、1800円)